

文化的学習としての母子の語り (1)

- 日本・中国・米国における非言語的情報選択 -

日本獣医生命科学大学	柿 沼 美 紀
文京学院大学	上 村 佳世子
中山大 学	静 進

Joint story telling as an opportunity for cultural learning(1)

-A comparison of Japanese, Chinese and US styles -

Nippon Veterinary and Life Science University	KAKINUMA, Miki
Bunkyo Gakuin University	UEMURA, Kayoko
San-Yat-Sen University	JING, Jin

対立的な人間関係を暗示する線画を3歳から5歳の子とその母親に提示しその語りを分析した。子どもが心の理論を獲得するこの時期に、母親が対立的場面をどう処理するか、東京と中国広州市、米国サンフランシスコ近郊で比較した。いずれの文化でも母親は語りを通して子どもに教示を与えていた。しかし取り上げる情報、解釈には違いがみられた。問題の渦中にある登場人物の内面への言及には違いが見られた。特に日本は米国よりも善意の解釈をし、中国は悪い意図を指摘している。一方米国は中国よりも問題の対応方法に焦点をあてている。中国は日本に比べ怪我などの危険性を指摘し、子どもに警告する様子が伺えた。このように、3歳の段階ですでに子どもは特定の状況でこういった情報に着目し、処理すべきかを母親との共同作業から習得し始めており、こういった違いは子どもの社会認知の形成に影響を及ぼしていると考えられる。

【キー・ワード】 語りのスタイル, 文化差, 日本, 中国, 米国

Japanese, Chinese and US children aged between 3 and 5 years and their mothers were presented with drawings of interpersonal conflicts. The content of the story telling sessions were compared. The age range covers the period when children acquire theories of mind, and thus mothers are likely to be concerned with their child's development and their focus of interests. The information mothers pick up from the drawings and how they interpret the situations can be a reflection of the social norms. The results indicate that there are cultural differences in the kinds of information mothers convey to their children. This transmission of information processing is already seen at age 3, and is a component of cultural learning which in turn influences the development of social cognition.

【key words】 joint story telling, culture, Japan, China, US

はじめに

東(2006)は二文化間比較の限界(相違は注目できても、共通点はおさえにくい、二分法的認識をもたらしやすい)に対して、同一文化内の下位文化の比較並びに三文化の比較を提案している。同一文化間比較は文化圏にとらわれずに比較することが可能になり、また三文化比較は様々な形の比較検討を可能にする。筆者達は東の研究グループの一環として母子の語り研究を三文化圏-日本、中国、米国-及び日本国内の三地域-沖縄、東京、山形-ならびに中国内の二地域-広州、内モンゴル自治区-において行ってきた。

母子の語り研究では、主として二つの地域あるいは二つの文化を対象にその成果を報告してきた(上村・柿沼 2004, 柿沼 2001, 柿沼・上村 2001, 柿沼・上村 2002, 柿沼他 2005, Kakinuma et al 2005, Wakabayashi et al 2001)。本研究では三文化の比較を通して、これまでの報告内容を再検討することを試みる。

社会性の発達

子どもは生後間もなくから他者の行動を意識し、自分の行動を調整することが知られている(Meltzoff & Brooks 2001)。そのような相互作用を通して子どもは言語を獲得し、同様に環境に応じた社会性を身につけると考えられる。生後 14 ヶ月頃にはすでに他者の意図を理解し、一定レベルでそれを共有することが可能になる(Tomasello et al 2004)。他者の立場を理解し、相手の行動を推測する「心の理論」の発達は 4 歳前後から見られ、これは文化を越えて共通した発達だと考えられる(Wellman & Liu 2004)。

このように、子どもの発達は人が種として備えた能力が、子どもをとりまく環境との相互作用で育まれて行くと考えられる。生物学的基盤として備えているものは共通であっても、働きかけの内容が異なる事で、環境の違いがそこに出現する。このような養育環境の違いは少なくとも生後間もなくから生じるもので、大きな枠組みとしては、文化差として取らえられるものが含まれる。例えば母親が子どもに用いる言語、また授乳方法、就寝形態などがあげられる。

言語理解に関しては、生後 12 ヶ月の乳児はその生物学的基盤に依存する部分が大きい事が、Fernald(1989,1993)の研究からも伺える。一方で、生後 12 ヶ月までの母親の養育態度の違いも多く指摘されており(根ヶ山 1997, 我妻・原 1974),すでにこの段階で子どもは養育環境の影響を受け、その行動が形作られていることが想定される。実際に獲得される語彙数を含む多くの発達の側面に文化差が報告されている(上田 1998)。生後 18 ヶ月の子どもへの語りかけにも文化差が見られ(Fernald & Morikawa 1993),このような養育態度の違いが子どもの発達に影響を及ぼしていると言えるだろう。

幼児期の発達

母親はその養育傾向として、子どもが関心を示し始めた頃を見計らい、積極的に特定の刺激に対して働きかける傾向がある。チンパンジーの幼児がナッツ割りを学習する期間、母親が子どもに容認的な態度をみせ、子どもの学習を促すように(Bosche & Boesch-Achermann 2000),人の場合も母親の

養育傾向は子どもの発達とリンクする傾向がある。それは一般的に子どもの能力に応じた形で行われると考えられる。

本研究では3-5歳の子どもとその母親を対象に行っている。この年齢は先にも指摘した様に、心の理論の獲得の時期でもある。それ以前は子どもは自分を基準に物事を判断し行動するが、この時期になると相手の立場を理解し、行動を推測し、自分の行動を調整することが可能になっていく。そして母親も子どもが社会の一員としてより適応的に生活するための働きかけをしていると思われる。例えば着目すべき情報、情報収集の手がかり、問題解決方法などのスキルの伝達などである。

先行研究

これまでに東京・沖縄・山形、広州・内モンゴル（中国）、サンフランシスコ（米国）の母子を対象に線画を提示して自由に語ってもらう課題を実施してきた（柿沼他 2005; Wakabayashi et al 2001）。基本的な絵の解釈は共通する一方、母がどこに問題性認めるか、どのような擦り合わせを必要とするかは異なっていた。

母親が特定の刺激から何を抽出し、解釈し子どもに伝えるかは、その社会の情報処理のスタイルを反映していると考えられる。また、子どもは母子相互作用を通して、その社会の非言語的な規則を学習すると考えられる。

今回は日本（東京）と中国（広州市）、米国（SF）の分析を通して、問題を起こした子どもの意図の扱い、問題の解決方法の内容など、親の関心がどこにあるかを比較した。

方 法

調査対象者：日本、中国、米国の3-5歳の子とその母親。日本は東京在住の親子20組（平均年齢53ヶ月、男11名、女9名）が参加。中国は、広州市在住20組（55ヶ月、男10名、女10名）。米国はカリフォルニア州スタンフォード市周辺の親子16組（55ヶ月、男10名、女6名）。

課 題：Wakabayashi ら（2001）と同じ手順。子どもの絵本を参考に作成した対立的場面の線画を4枚（はしご、泣いている子、砂浜、走っている子）を提示し、それを用いて母子で話をしてもらった。日本の場合は自宅及び友人宅、中国は幼稚園の一室で、米国は自宅で実施。母子のやりとりは音声と映像で記録した。録音したテープを起こして使用。中国のデータは中国語に起こした会話を日本語に翻訳したものと、原語を参照しながら分析。英語は原文のまま分析。今回は4枚のうちの「はしご」（図1）を分析。

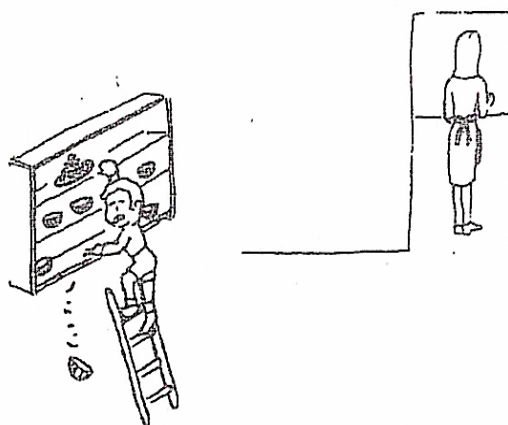


図1 「はしご」の線画

言及項目の検討：発話を以下の分類でコーディングした。「茶碗」がどうなるかについての言及（茶碗が落ちる，割れる，など），子どもの意図を「悪いもの」（だまって食べようとした，こっそり取ろうとした，など）として捉えているか，「良いもの」（お手伝いをしていた，など）ととらえているかを検討した。また，この後に考えられる状況への言及として「茶碗が落ちた後」（片付ける，お母さんに見つかる前に捨てる，のりで貼って直す，など）について述べているか，また「落ちた時の母の反応」（怒る，危ないと言う，など）及び，「子どものその後」（はしごから落ちて血を出す，など）について具体的に言及するかをカウントした。

結 果

茶碗を落としそうになっている子どもの行動の説明（勝手に盗る，お手伝いなど），子どもが茶碗を落としそうになった行動の結果（茶碗が割れる，母親が怒る，子どもが落ちるなど），この次の場面で子どもはどうすべきか（茶碗を拾う，捨てる，謝るなど）への言及率を三文化間で比較した。

子どもの意図：子どもの意図全般に関する言及に関しては図2に示すように文化により違いが見られた（ $2(2)=9.76, p<.01$ ）。そこで，残差分析を行った結果，中国では言及が多く（ $p<.05$ ），米国では少ないことが分かった（ $p<.01$ ）。同様に悪い意図の解釈に関しても有意差が見られた（ $2(2)=6.88, p<.05$ ）。残差分析を行った結果中国で多く（ $p<.01$ ），米国で少なかった（ $p<.01$ ）。善意の解釈についても文化間で有意差が見られ（Fisherの直接検定， $p=.032$ ）。子どもの意図の解釈例を表1に示す。

文化的学習としての母子の語り（１）

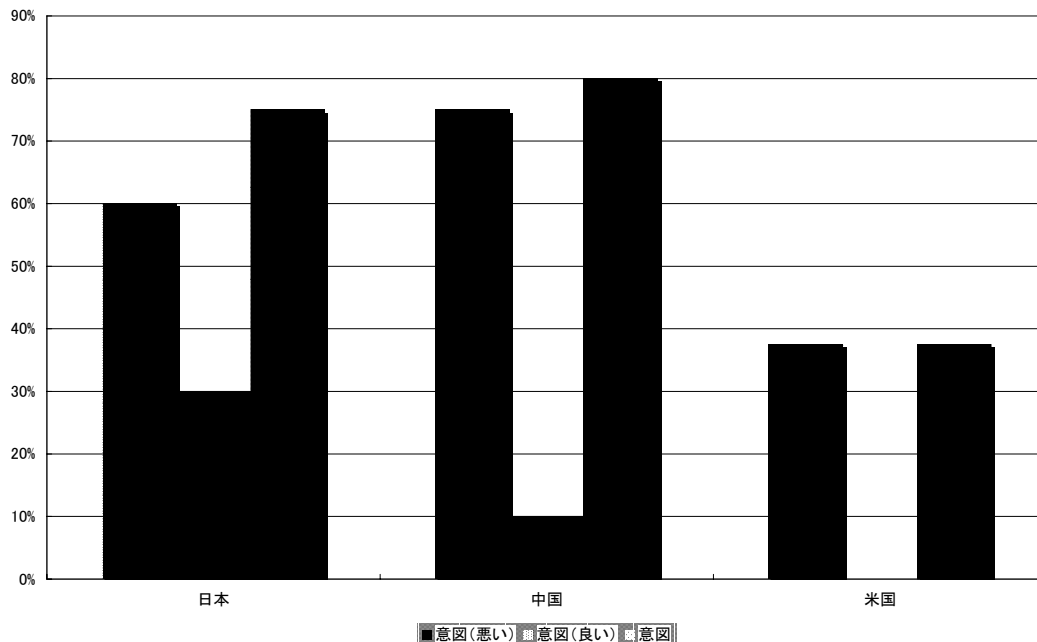


図2 子どもの意図に関する言及（グラフ）

表1 子どもの意図の例

日本	<p>きっと食べたかったんだね。お母さんにとって言えば良かったんじゃない？ お母さん背中向いている間にお団子一つ食べようと思って・・・ お手伝いしようとしているんじゃない？</p>
中国	<p>ママがご飯を作っているとき、隠れて何かするのはいいの？ ママは明日あげるといったのに、この子はそれを忘れて勝手に盗った。彼は自分から進んでママのお手伝いをしていた。</p>
米国	<p>Is he supposed to be way up on there all by himself on that ladder? She said "oh you go out and play, but don't get into anything! So then what happened? He got in.</p>

子どもの行動の結果：日本，中国，米国いずれも茶碗が落ちることを指摘している。一方子どもが落ちることに示すよう文化間で有意差が見られた（Fisherの直接検定， $p=.007$ ）。

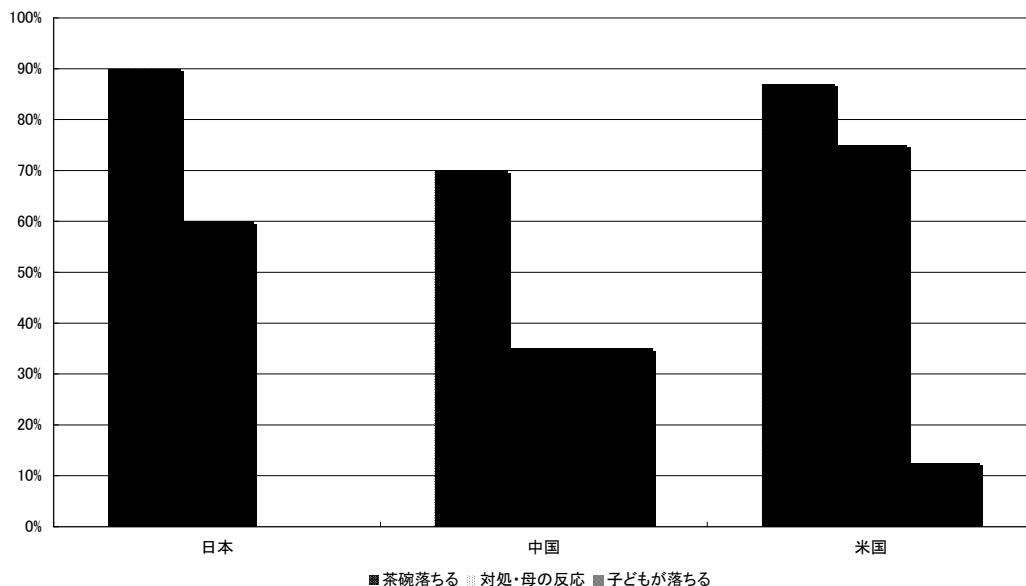


図 3 その後の状況に関する言及 (グラフ)

その後の対処方法: 母親の反応及びその後の対処方法については図2に示すような傾向が見られた(2(2)=5, $p < .10$)。その反応及び対処方法の内容はさまざまであった。日本は事態の收拾方法を提示している。中国は一般的な解決方法を示しているのに対して米国は具体的な方法に言及している(表2)。

表 2 対処方法 (母子の発話内容)

日本	なおす, おかあさんにしてもらおう, ごめんなさいと言う, ひろう, もどす
中国	弁償する, あやまる, こんどはきちんと(取ってと)言う (梯子から落ちたら病院に行く)
米国	ほうきで掃く, 糊で貼る, 片づける, 新しい物を買う

考 察

1. 三文化間比較から見えたもの

本研究では「はしご」の分析を三文化を対象に行った。筆者らはこれまでに同じ「はしご」の分析を日本と中国で行ってきた(Kakinuma et al 2005)。その結果問題の渦中にある登場人物の行動の意図に善意, 悪い意図もしくは, 意図全般に関する違いは見られなかった。はしごから落ちると危険というコメントは中国が有意に多かった。

三文化間の比較は上記で曖昧だった傾向を明らかにすることができた。まず, 登場人物の意図に関

する言及では、文化間で違いが見られた。三国で比較することで、中国と米国の差がよりはっきりした。さらに、中国は米国に比べ登場人物の悪い意図の解釈が見られた。これも二文化間の比較では見えてこなかった。日本が善意の解釈をする点は、中国との比較では明らかにならなかったが、三国間で比較すると有意差が見られた。問題の渦中にある人物に対して善意の解釈をするのは日本に特徴的な情報処理方法と言えるだろう。中国と日本が内面重視、米国が対処方法重視であったことは、アジアと欧米の考え方の違いを反映している可能性も示唆している。

登場人物の行動の結果については、先行研究と同じく日本に比べると中国ははしごから落ちる事を指摘しており、これに関しては三文化間でも有意差が見られた。その後の対処方法に関してはちがう傾向が見られたのみだが、文例からは考え方の違いが伺える。日本はあやまる、なおす、拾うなどのおおまかな事態の收拾方法を、米国では糊で貼る、ほうきで履く、あたらし物を買うなど、より具体的な行動の提示が見られた。

２．社会認知能力の発達と母親の働きかけ

56組の母子の語り場面に共通していたのは、線画の基本的な解釈（子どもの手から茶碗が落ちそう、問題であること）及び、母親が線画の中から特定の情報に着目し、子どもとのやりとりを通して子どもに対応方法を伝えようとした点である。しかし、上記に述べた様にそれぞれ問題とするところは異なり、その対応方法も異なっていた。

子どもは周囲との相互作用で言葉を獲得するように、心の理論などの社会認知能力も獲得すると思われる。日常生活の中で母親は折に触れて対人関係や状況判断について子どもに説明をし、情報収集及び分析方法を、さらには分析結果の応用方法を提示しているのだろう。本研究で見られた母子の語りもそういった一場面と解釈すると、社会認知能力の基盤は3歳の段階ですでに母親から子に伝えられ、その手法は文化によって異なる。

何らかの理由でこういったやり取りの機会が剥奪されれば、子どもは社会適応に必要な情報処理のノウハウを学習していない可能性も十分考えられる。また、子ども自身がこのようなやりとりの成立あるいはそこからの学習が得意ではない場合、社会生活への適応が難しくなる可能性がある。ニホンザルの場合、乳幼児期に母子相互作用の経験が少ないとその後の適応に問題を来す事が報告されているが（南 1994）、人の場合も多くのノウハウが母子相互作用の中で子どもに伝えられ、それが子どもの社会への適応を円滑にしていると思われる。

３．スクリプトの伝達

幼児期からすでに何に目を向け、それをいかに処理するかの訓練を受けると考えると、異文化との接触は言語、習慣のみならず、基本的な情報処理のレベルの違いを含んだものになる。本研究で用いた線画では、限られた情報から文脈を読みとることになる。そこには文化的環境に適応する上で必要となる情報が含まれる。

今回の分析から、日本と中国では登場人物の内面重視という共通点はみられたものの、こういった内面に焦点をあてるかは異なっていた。それは、語り場面で何を伝えるかの目的の違いを反映してい

ると考えられる。日本は問題が起きたあと事態の收拾を図るための方策を、中国は、悪い部分を強調し、子どもに予防的指導を行っている。

日本では衝突を避けながら事態の打開を測る方法を重視する傾向があり、いかに穏便に問題を解決するかが重要になる。相手に悪意のみを見いだすことは、後の人間関係にしこりを残す可能性があるため、なるべく避ける力が働いているとも考えられる。

一方中国では子どもに警告を発することで、子どもが自分の行動に抑制をかけ、問題に巻き込まれない指導を行っている。「落ちたら死ぬかもしれない」といった警告はまさに子どもにその危険性を知らしめ、間違っても試さないように指示している。それが「悪い部分」の強調と関連している。

米国では、こういった事態に陥ったらどうするべきかに重点が置かれている。なぜそのような事態になったかよりも、この後どうするべきかを重視している。つまり、登場人物の内面を詮索するよりも、物理的な解決方法が優先している。おそらく価値観が多様な米国において、それぞれの意図を詮索し、次の行動を判断するより、的確に問題に焦点をあて、解決する力が求められるのだろう。

4. まとめ

本研究で示された違いは、それぞれの文化における葛藤場面のスクリプトの一部を反映していると考えられる。そしてそのスクリプトは3才の段階で親世代から子世代に伝達されている。社会的認知能力が伸びる幼児期に母親が積極的に子どもに働きかけ、子どもも母親とのやりとりに参加し、必要なスキルを身に付けているのだろう。母親は子どもが自分の生活する社会に適応するのに必要な情報を日常のさまざまな場面で伝えていると思われる。従ってどのような社会規範を親が想定するかによって、伝達される内容は異なってくる。

本課題はシンプルではあるが、そういった環境の違いを反映させるのに適切だったと考える。上村・柿沼(2006)に示すように、筆者らはこの課題を日本国内及び中国国内の下位文化でも実施している。今後は文化間比較と下位文化内比較、さらには日本と中国の下位文化間の比較を通して、どのようなスクリプトがこういった形で伝達されているかを検討していきたい。また、それぞれの働きかけのスタイルが子どもの社会認知発達にどのような影響を及ぼしているかも検討していく必要がある。

参考文献

- 東洋 (1994).「日本人のしつけと教育 - 発達の日米比較にもとづいて -」 東京大学出版会 .
- 東洋 (1999) 文化心理学の方法をめぐって：媒体概念としての文化的スクリプト．*発達研究* 14, 113-120.
- 東洋 (2002) 社会的道徳判断の国内下位文化による変動の研究：文化間変動因と文化内変動因の交差受 当の試み．平成11年度～13年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(1))研究成果報告書．
- Azuma, H. (2000). Moral scripts: A U.S.-Japan comparison. In H. Shimizu & R.A. LeVine (Eds.), *Japanese frames of mind*. Cambridge, U.K.: Cambridge University Press.
- 東洋 (2005) スクリプト比較研究の文化心理学的位置づけ．*発達研究* 19, 1-11 .

- 東洋 (2006) 行為の理解、推測、評価の認知的枠組みとしての文化的スクリプト . 平成 14 年度 ~ 平成 16 年度科学研究費補助金 (基盤研究 (B)) 研究成果報告書 , 1-11 .
- Azuma, H. (in press) Conceptual issues of cultural psychology. Psychological science around the world: vol.II: Psychology Press, 305-318.
- Boesch, C., Boesch-Achermann, H. (2000) The Chimpanzees of the Tai Forest: Behavioral Ecology and Evolution. Oxford University Press, Oxford
- Fernald, A. (1989). "Intonation and communicative intent in mothers' speech to infants: Is the melody the message?" *Child Development* 60: 1497-1510.
- Fernald, A. (1993). "Approval and disapproval: Infant responsiveness to vocal affect in familiar and unfamiliar languages." *Child Development* 64: 657-674.
- Fernald, A. & Morikawa, H. (1993). Common themes and cultural variations in Japanese and American mothers' speech to infants. *Child Development*, 64, 637-656.
- Kakinuma, M. (1993) A comparison of the child rearing attitudes of Japanese and American mothers. *Childhood*, 1, 235-242.
- 柿沼美紀 . (2001) 母親の語りに見られる地域差の検討 . *母子研究* 21 , 56-61 .
- 柿沼美紀・上村佳世子 (2001) 母親の語りに見られる地域差 - 東京と沖縄 - , *発達研究* ,16 ,116-124 .
- 柿沼美紀・上村佳世子 . (2003) 母親の語りに見られる地域差 (3) - 東京と沖縄の発話構成 - . *発達研究* , 17 , 87-96 .
- Kakinuma, M., Uemura, K., Jing, J., Jin, Y., & Mayuzumi, M. (2005). Mother's moral messages to her children through story-telling sessions-Chinese values judge right and wrong, Japanese morals emphasize harmony-. Paper presented at *Childhoods 2005*.
- 柿沼美紀・上村佳世子・静進・金宇・黛雅子 . (2004) 母親の語りに見られる文化差 - 東京と広州の発話内容の比較 - , *発達研究* , 19 , 47-53
- Meltzoff, A. N. and R. Brooks (2001). "Like Me" as a building block for understanding other minds: bodily acts, attention, and intention. *Intentions and intentionality: foundation of social cognition*. B. F. Malle, L. Moses, J. and D. Baldwin, A. Cambridge, Mass., The MIT press: 171-192.
- Meltzoff, A. N. and M. K. Moore (1992). "Early imitation within a functional framework: The importance of person identity, movement, and development." *Infant Behavior and Development* 15.
- 南徹弘 (1994) . 「サル」の行動発達」東京大学出版会 .
- 根ヶ山光一 (1997) 親子関係と自立 , 「文化心理学 - 理論と実証」 柏木恵子・北山忍・東洋編 東京大学出版会 , 160-179 .
- 大藪泰 . (2004) . 「共同注意 - 新生児から 2 歳 6 ヶ月までの発達過程」 , 川島書店 .
- Premack, D. and A. Premack (2003). 心の発生と進化 , 新曜社 .
- Rothbaum, F. & Kakinuma, M. (2004) Amai and attachment in cultural context. *Human*

Development, 47, 34-39.

Tomasello, M. (1999). *The cultural origins of human cognition*. Cambridge, Cambridge University Press.

Tomasello, M., M. Carpenter, et al. (2004). "Understanding and sharing intentions: The origins of cultural cognition." *Behavioral and Brain Sciences*.

上田礼子 (1998). 「発達のダイナミクスと地域性 - 岩手・東京・沖縄 - 」ミネルヴァ書房

上村佳世子・柿沼美紀 . (2004) 母親の語りに見られる地域差 - 東京と山形の発話構成の比較 - , *発達研究* , 18 , 125-135.

上村佳世子・柿沼美紀 . (2006) 共同行為としての母子の語り - 東京・山形・沖縄の発話構成の比較 - , *発達研究* , 20.

Wakabayashi, T., Fernald, A. & Kakinuma, M. (2001) What, how and why?: Japanese and American mothers' questions in joint storytelling sessions. Poster presented at the 2001 Biennial Meeting of the Society for Research in Child Development, Minneapolis, MN.

我妻洋・原ひろ子 (1974) 「しつけ」弘文堂 .

Wellman, H. M. and D. Liu (2004). "Scaling theory-of-mind tasks." *Child Development* 75: 523-541.

< 謝 辞 >

本研究の調査にご協力いただいた親子の皆さんに心よりお礼申し上げます。また、本研究の課題を作成した Stanford University の Anne Fernald 先生および米国の調査の中心となられた Tomoko Wakabayashi 先生に心より感謝申し上げます。

< 付 記 >

本研究は科研費基盤研究(B)『行為の理解、推測、評価の認知的枠組みとしての文化的スクリプト：日・米・中比較研究』及び学術フロンティア推進事業「LDの国際比較研究-非言語性能力・心の理論課題検査の作成と日中比較」の一部として実施された。